

枇杷園七巻集初編

下



下

23 0-130

俳諧資料カード

年代

編者
筆者

書名

備考

枇杷園七巻集下

本館蔵

南館

(下垣内蔵)



上
 磨
 之
 磨
 之

佛指の正風を口へ尾張の玉と吹乾わて
 冬の日枝玉・秋の山吹をぬきかき芭蕉の翁
 魂をすいたも他人わきさへ哀れおぼえぬ
 と身ををわくくすも風程くく部一鄙
 をりくくの吹りくくあくはあく又来り
 たまへり。甚くろ弊田小指ておひさし
 袂路の大に破れたるをきき志のふんが
 中へお生ひあひを中へお生ひあひを
 んとく中りくくを中へお生ひあひを
 磨雪は後不道言をもちくひお生ひあひと

人の心や依屋の泊る仮寐せらむと成
 海色の鴨あつた白く子鳥啼き星夜の
 声よふ心をよまきく 笠をきく ことごとく
 とききなり ことごとく 是もは和とをさあかり
 代々く小田路のさきとく 親き人のなりと也
 粟稗のたぐふ原の菴を尋ね入刈田の
 眺み佳菜をみ ことごとく 帰る ことごとく
 夕言ふハあり ことごとく なる ことごとく 似て古
 月をあらむ ことごとく 葉やうく ことごとく 付ぬる
 華をうきむ ことごとく 日書 林風月 ことごとく
 是もやさしく ことごとく 覚え ことごとく 志り ことごとく

七七七切下

休らふやせよ ことごとく あり ことごとく ことごとく
 いさ出ん ことごとく ことごとく ことごとく ことごとく
 丁卯猶月 ことごとく ことごとく ことごとく ことごとく
 奥一 ことごとく ことごとく ことごとく ことごとく

五嘆ハ風月 ことごとく ことごとく ことごとく ことごとく
 いさ ことごとく ことごとく ことごとく ことごとく

其句 ことごとく ことごとく ことごとく ことごとく ことごとく
 又め ことごとく ことごとく ことごとく ことごとく ことごとく
 とふら ことごとく ことごとく ことごとく ことごとく ことごとく
 わく ことごとく ことごとく ことごとく ことごとく ことごとく
 ことごとく ことごとく ことごとく ことごとく ことごとく

何の幸ひを和言やの幸云を和言しや
其師も今ハなくなり玉ひぬらふわは
風月堂中ふ席を収めて人々を舎へ
少も尔翁の美談み終極してあふふ
まきの後を次く

七二八四下二

麻刈集

雪之卷

いしらハ言忍ふらふ不すて
百逢はむきるぬのすすつ
塩むらう小纏いらら皆裂らん
又さし出たまの地の塩えさ
山吹のあをを入りりみく
菅子貝をうえらるるり
桶の底かくりとぬたてまのあ
あうまきあう日ま降りり
信貞一伊賀の石切来逃

士朗
暁臺
朗
臺
朗
臺
朗
臺

是奇くハとして死回を破る
 執事始を井をるくふ下居つ
 々ふも焼坊始を鳴り
 ひちくは井おひ物る月代尔
 貝壳櫃ふけりる阿き風
 森志もや棠ふりきちん氣
 本質の温泉に程り別る
 刀賣る人ふ出回ふ花のうけ
 破る泥障を師突よ發
 妻のを一時的の鐘あり
 ぞしたをまき戸ひく推る

七三ノ下三

朗 臺 朗 臺 朗 臺 朗 臺 朗 臺

伊扇人免かくまふまあうちん
 梅喜くきく門阿海う酒
 烟そふて折障りくぬふり
 垣より物水のちりり
 光はに物を玉うとふふとり
 ふま下向のちりりき朝明
 父を松母を極と有りめち中
 涼世の空を風の送りり火
 蒼る夜の月を波よりとる也
 福すく勢玉へ厚能鳴り岩
 鏡て千代衣もなき才ふり

朗 臺 萬岱 羅城 岳輅 閻毛 岱青 蘭水 卧央 彪門 紀鳳

目の盲るまで歌く日本記

朗

終極喜遊記の戸海山つ

城

喜をよめる人々てハヤ

青

本の下ふけも鶴もさく

島
拜吟

蛇の鳴日多今も長深心

白園

君のりて名を降りて日

枇杷園も愛敬し

言もてる言の鹿元ちう

暁基

梅一葉初春すてハ花たへり

冬
帯梅

邪の脱去を名めくりもつる

人々の名をいひまじこニツク

くもたすまきすりありあり

枯くももひの葉く

神言の初りふらむる板戸哉

士朗

茶室

枝炭小見ゆらハツツの落言を

盛室

落言やまじく白菊はあう

梅吳

白雪をわらうもの小をハ東

聊于

多鳴と舞りり松の言落言

杜常

けくくやをふもな言の山

琴波

赤良坂や麻の尾小見のくさの香

青峯

衣を着は深紫よけは此を

岱青

ぬくく少もふ麻色す葉を

間毛

書懷

月小老のつらひのくさの香

白圖

降る雪は花のふはりぬき

文陵

人のリ方しりく風の名

騏六

兩尾山

老松の香をよめる風情哉

木人

はくくくと香のふるて

信八 自徳

深くやしきの香をよめる

木吾

呼喚松風の里

香を出して空の香をよめる

臥央

萩の香をよめる香をよめる

紀鳳

香のやまをよめる香をよめる

沙漠

香の日やんほく香をよめる

羅城

風をよめる

木くくくくくくくくくく

香をよめる香をよめる

白圖

砧うつ遠山をよめる

士朗

魚依漕舟もろくをり
夷およ古き風情やのるらん
橋をとりぬ人としてハナ

徐英

朗圖

登ハ事山

木く〜〜は佛の鳥の志つうや
ぬ〜〜小隣多所き日暮
帆や舟をたぐく山のささくま
こく〜〜よ山又山のささくま
木のゆて木く〜〜やも吾家
木く〜〜おとりまもたる和鳴

岳輅

臥伏

吟幸

古常

啟甫

騷道

風小夜聲もろく破戸外

五周

盛青

こく〜〜の吹つりしてふのぬいた外

虎足菴のせのせき岸高橋を

土橋をとりまもろく小丸よも

木く〜〜張りさ〜〜答む橋りか

白圖

平系あて

木く〜〜ハ小町う死て幾世もろ

趙鳥

木く〜〜や海一屋よ出る月

士朗

こく〜〜ハ落木ある深山つ〜〜

卓池

風や夕山鳥の鳴り〜〜

卓池

こく〜〜のちうせをう〜〜

曉臺

そ風

すこゝろ人小ぬうけりけり
初枝の月をまろしむ半簾
花鳥やしなむ白萩のうけ
七本の鉾のさひするまろし

訪隠者

芦鴨の足水かゝる奥子
水鳥や汝住江移ちろくき
夕月小むむひて鴨の流けり
水鳥花尾吹木こち日枝下風
水しりのあおろしむ嵐うか

うまうもや男小射高さこき
ぬあてて沉かぬの浮寂を
水しりや小笠かゝるの朝日や
ろしりやたさくうこく人の乳
あゝるあうきこ流を移るあ
ありの子小まゝ海苔かゝる松を
居るやうきふ不居たり春の暗
夕川せのあう小鴨小雲のうき

漢

全

臺

全

多墨山

岱青

嵐桂

庭甫

帶梅

地至

曉臺

青霞

沙漠

士朗

岳輅

昆明

紀鳳

白圃

冬枯の巻

信まゆへ枯く候ふ舎うか

金屏の松の古きよきこもり

雀来て啼々さの木か

手紙や細引の狸もふつん

腐き一机流ふも崩しぬる

宿家小いまづまかりる月ハ雲

昔もかりしも拂ふ長刀

杖悲し名をハ柱一そあり

枕ぬきたるあな方のらぬ

宿ぬきたる能也新浦波をくす

妙法花經を埋むしそきふ

尾ぬあさりもりあそく涙焼

月此為小辰乃四所々きと

わりとすてたるあかのより外

笠懸の雀小初まの小侯色

そく眠たれも病なり

花流るる日辰月影かむ

ちるく不痛のあうすむをり

岱青

曉臺

青

臺

青

臺

青

帶梅

大阜

青

臺

阜

梅

臺

青

梅

阜

幼佳菴小を結して

火桶抱るるかこ孫あらし小松庵

臥央

世を蟬好すささきゆらんを發

曉臺

危を發うゝあ日板の種ゆゝ急

岳輜

むゝろ戸せ月あゝりのを發

龜六

萩ふふもゆる事も有りをこもり

士朗

二三日ハ二橋下志ゝすをあそり

昆明

冬あもりすも葉ありふ板やをさ

京
山嵐日

山の奥あも田一枚ふゆこゝり

羅城

は奥ふ人そしすゝてやをこゝり

兎石

或人の油をさそり冬あそり

北橋

閑歩

白圖

ワ友間毛發伴て後箱香川のあ

をけうゝ湯て葉を煮つゝさをそん

たのこゝり

五月桂一竹の奥なりふゆ發

岱青

磁石のま

たひおし一石を師志の夕月疾

市のゆふりのうこく埋ゝ十人

見明

歩り一人をうつげりあゝ梅よ

曉臺

ぬもあ葉の日を風情あり

明

八月十四日 東湖上を歩く

東望 ねもふくと志きりなり波の徒
夏のためい草の極をこゆるあ月
ワウ 祿ハハふをくきり ねく子親
一日 祿たひや ねは ねの ねの
表 風 ねに ねふたき 砂のおひ

刀 祿川 夜泊

旁より ねて ね戸の 祿を ねの ねへ
さよの 中山 正原 あえも ねりか
あうらうの 笠をつくら 祿 祿

白圖

權玉 眉

儼音

仙布

卧央

魁門

支一音

賈友

其 中 山 正 原 山 正 原 山 正 原

の その 山 正 原 山 正 原 山 正 原

あ 日 正 原 山 正 原 山 正 原

祿 ハ ハ の 山 正 原 山 正 原

表 々 々 人 山 正 原 山 正 原

薄 や 依 見 ハ 山 正 原 山 正 原

三 日 月 山 正 原 山 正 原

大 岡 寺 山 正 原 山 正 原

吾 志 山 正 原 山 正 原

る と 山 正 原 山 正 原

る と 山 正 原

曉臺

少如

巢居

桂五

岳輅

沙漠

冬の日能程うくくやる於山

士朗

虫能言や和らハるまじ山の上

巴江

澄み香のきくゆるやまじづり

物哉

片浪ハ沸きき海のうらもけ

伊奈支

若松山をとりくくを老山よ

のりの上は房州をとりくく

閑寂又たくひなり狭中初尚然

雲基といひ

大阜

狭中を能む蚊を能む山の上
蚊を能むぬき布も枯ハ立みなり

昆明

徳吳

河原菊並きり井ふ鳴ふりり

非如

うらるや舟能をわくも濡蒲團

桃生

子東う赤武ふ形を能橋といひ

送り来りて

層のあり同し差足て物色なり

士朗

あつてもや字能の之の廿日

絶鳳

一年言能事

年能事能事能事能事能事能事

川尻能事能事能事能事能事

紀風

楊柳をちくと枇杷の花ちりて
夕陽の連翹をまきかへてたしく
盃にうけてあやうむ之日の月

暁臺

士朗

鳳

幸子野をふふ草

人の心は魚の如く

昭雪の人あも幸の名跡うらふ
心を焚く幸を懐むう沖の舟
幸の日記をうらむ若く又おれしく
はりたるう幸も川や岸折戸

羅城

閻毛

騏六

臭日

落る雪の初て幸の影をうきけ

暁臺

似合いや幸も人の革羽

沙漠

蝶拂い幸深きく見ゆ

徐英

うき舟の菴うあやう蝶拂

圃暁

市よふまで幸の影をうらむ

幸の影ぬねるあ角力のあるをひ

士朗

幸の影又りゆりえの影の奥

卧央

幸の影又りもことよりよ蝶拂

五寅

燕の巣をうらむすのすけ

蛙聞

人間の彩色をうらむ

賈友

人間の彩色をうらむ

鹿門

岨崎小舟人八掃より年の暮

里采

年もい中日あり月あり天津丁

新事や人も落つく秋風の暮

年の暮嶺の月間を住居引

おもいろく又たり梅を陸塵毛

岱青
紀鳳
岳輅

昆明

暮るる暮

芝草やいぬ牽も暮るの乙

あちりしと梅の花 四

附るぬきを拵ふるつ見

駒六
士朗

月此夜おもき満園も月覚まハ

夜夜をりくあふくむ一陽

山居

梅はくらくを間を暮るの乙

暮るるや山のうへまで月よき

花は秋のうつくよとんれハ暮るの乙

暮るるのあふくと物又更り暮

逢坂を越る日

かゝるの乙半の顔を流るる

暮るの乙砦守夜ふいたる

よく笑も暮るの降草屋住

岱青
岳輅
物哉
羅城

六
朗

桃睡

庭甫

越毛

三

二日降て暮中ぬのくく郡

驥六

幼子の夜中寝ひや喜のる

士朗

梅の木のきくくさ小娘く喜の西

大年

鈴鹿山

喜取や茜桑新枯花あふ日ハらく

玄

ちのさめや夕日ふうふうより炭

閻毛

けるの阿免よく足巻ハ袋押今

昆明

喜取や朽葉あやむおん新田川

圃暁

喜のる松があらふお松やある

蘭水

ける取や枯木のよを降く

暁臺

水鷲の忠

各鷲啼と人の心は常修至道

間毛

面降あまうの花の川

曉臺

滝の東流せやまててきれなり

全

櫻ゆり上は眺のびくいす

毛

白鷺すし新葉花川

全

女郎花靱少袖をぬきくけ

臺

世ハ懐風破るつをな

全

うき風のよも返に東のき

毛

母ふくくまて魚しりあゆく

毛

七五三切ハ核の本の神罪すん

臺

母智ら名跡屋敷七五

毛

月の家口まふ飛鳥の心あり

臺

折まゆ何をうやゆく舞

毛

草儀神何らあ守貝吹て

臺

小浅きめたる僧衣なり

毛

花臺十日もあゆたこころ

全

夕汐さのう藻魚物うゆ

全

砂るふあふふううまき庭

臺

解きり神の鼓の音を

毛

楯の火色く目まろ啼よる

全

雪落の糸をきこけるむきりふ

臺

せんすへたの帯俗あらん

毛

あ吹碓礮の藝の音くもり

全

縄つけてねく櫓のうき板

臺

鴉

門けく水も汲す水鶏なく

楚分

傳向て鳴りあ鶏も月のまど

開更

落る齒をつてむ様ふあふんをそ

士明

ありの賛

晴まきとありのまきのたもとと外

蘭更

ひくくと略のまりのあ日とう南

青阿

時多や田縁の略のまきと

万峰

捨中松略のつくと並ひたり

梅虎

竹垣の休くとつくと略のまき

昆明

略まきやあけてあけきまのあ

羅城

あちとあちと略のまきとあ

桂五

晴まきとありのまきとあ

多宜

回

月あくとあくと略のまきとあ

之楓

晴まきとありのまきとあ

雨曉

月あくと略のまきとあ

南溪

夕まきとありのまきとあ

米汁

晴まきとありのまきとあ

騏六

草庵の巻

雲稗おそりともあつて草の庵

枯のまきとあちとあちとあ

卧央

とらあえらるる海士のふり生さす
漁の海士ふををををす
すふををの都ちうと細ひ毫
友の存ちのちのちのちのちのち

士朗

素兄

央

兄

間居

稻居まひひとり万歳事りる也

笠
丈芝

檀溪

霧おわく降り後竹をまて葉の烟

士朗

い白の深るるおもひまきこはるくきて

附ハ二月の二日るり後のあたるこよとて

そとありまき菴のんえんせハ

あまえくし柳降り能うは新

岳輅

隈くのゆらきま林のゆらうか

蘭水

山吹のこころをそゆき極く南

間毛

月代や紙帳ふゆる萩すくき

白圖

秋の夜の露ううはる垣うか

信州
素檠

屋根正をまはさうくそ若おと

同
芸門

夕陽をとくつてともみ肘を指とす

暮の赤や中を落る柳もや

儲青

う所方ハ附あま枝能をううある

魯衛

長閑さや朔夜宵露庭をり

吟 ぬ肘ほくひんえたる雉ふゆ

志く萩ハももき 林新光ん

吾朝の松をんて 旅の師走は

門口に松笠ひろふ 雪ふる

きりくくは 鳴や 萍のぬきまけ

帯梅

京百池

満子きき

騾六

大阜

圃来

題画

善虫の標急しと 鳴りまをる

沸しゆ小蟬も 鳴りまをる

川の古木の樹は けりさくうをのそ

夕鳥や 遠はる石の 菴や 菴

萩のくく蛙 揮出は 小庭外

藤鳴りて 雲をり けり 山家集

入妻

羅城

曉臺

岱室

巨川

也梁

月の巻

月をあるたとふも 似守 二日の月

月をあるたとふも 似守 二日の月

ひよるくくく小まのまのまのま

元てな一きき山 花 中一 是

輝 月をあるたとふも 似守 二日の月

ひよるくくく小まのまのまのま

羅城

曉臺

城

臺

城

林卧

萩萩やうきこすもあつり二日月
二日月後の波もさるうりやうり
三日月の筈のまき合ふ光計
三日月ハ玉のかりもすうこ計
松をいふ引もハ夕月傾きけり
月落ちてやうき青もくく雲なり
露のまき月のかききやうり計

士朗 羅城 騏六 蛭芝 卓池 岱青 桃睡

林臥來の萩萩屋の松のいせ

とてとてとてとてとてとてとて

松影のうらや月影をそ看みやう

士朗

暮ぬ更ふりもせらもて三河は

さうひみあわ

二むくや三河みあう松の月

岳轆

月影中ふまの影ありは流流

吳井

松ふくつを流つ歩り月見計

岡毛

月見まハ悲し古人を月み破り

満子

平うに夜ハいとりやし林の月

岱空

代くふ身一人の泪り月のまき

五周

白圖

白圖

仍くして帆送く〜んぐふの月

素元

月出て橋あきき〜りりり

青霞

さやけゆふの限りを〜の月

逸漁

秋夜露ハ月〜も〜く嵐ハ

桂五

風狂萩〜〜〜て月をひくを

卧央

出月や海〜えを〜面さ〜

蘭水

琵琶橋

月出て橋あきき〜りりり

万岱

月の物ふ〜あき林の子規

南陽

杖圍

懐〜月のさ〜

大阜

早〜い〜

芦涯

后秋月あきき〜の余ハ

丈芝

ひ〜り〜

あ〜ふ〜

あ〜ひ〜

さ〜を〜

あ〜の〜

月〜の〜

名〜の〜

一入〜の〜

大うけれ多き七夕の宵

芦の葉の月さやくと川風ふ

誘田の木末春う葉々り

望の音の秋の匂ひを以て

むらゝ夏ふの姉うは田 糸

うき人の眠を斬り鳴り雀

竹をうらほの木尻は程い

頂か又肌を脱せし俳た衣

板戸の飴のむける喜の日

海草 蚊ひらりりき確 浪意底

宵のよ然明り 画方り

二人すて今事かり糸束も麓ち

ふやととゑを山伏り 幸

松風やさすくふ姉の控不

あろのたぬ朝良の志

杉ふふをり母も泣せざる

神ふばいにてうくは 康 後

葉抽を足透はやとふを智て

うきよの中をぬのるく

ふをゆりく人のふませぬ 落 富

永齋

大巢

底 鷗

底

委

倚

朗

有

美

齋

鷗

底

春

峨

朗

有

美

齊

巢

鷗

底

花の戸口をひりく〜とあ〜
そくろをりるりふふふむ春の苦
風呂菱軒〜蒲公英の窓
蔓字のうら〜の里ふ母抱て
みのふ〜いの朝日あつらき

我 崎 齋 巢 美

竹有 四

士朗 四

青嶽 四

沙鷗 四

元美 四

月式 四

齊 四

鹿野

いつ掃たす〜そさ月の面の座

雫の浮巢をつくる草 草

襦衣あ〜柳を笠ふきて

春の名跡の身ふ蓋する

有明〜露の〜〜朱ぬらん

飯の清〜門ふか〜家牛〜飼

不落の美糸を吐ふきれ〜目又張て

木をきり〜〜〜はけ〜〜一校

年の貝大和〜平の藤くも〜

士朗

黄山

岳輅

九岳

野

朗

山

格

墨の袂のやまろひをぬく
 紺島の花より松を足破りて
 小町うとを七夕秋月
 玉むしハ露はぬきたる唾君
 若さハ粟子のこりりの下水
 笠舟又一吹風のうつるあり
 草鞋いくらりのり居の春
 明る花の花は小きとき昔はけ
 来つともあふれの中こち

活正の... 宿を... 海やり

人まくとせの... 字を...
 春うめ... 山... 姥...
 釣籠の纏の... 水... 中...
 秋... 石... のへる... ぼく... きたり
 月の... の... 袴... 惹く... あり
 鳴... 鹿... も... つき... やの... 松の... 風
 芒... 由... き... 萩の... 一... 本
 雪... 中... 年... 里の... 麦... 荷... て
 狐の... やう... を... 鯨... き... る... あり
 くらくとり... 石の... 地... じり

野 岳 輜 山 朗 野 岳 輜 山 朗 野 岳 輜 山 朗 野 岳

休をくくくる嶽の山
葛城の神の輝ひも其にて
あなをの白ひ神又あつりまの
新の志緒くさうある誓特
いつも日の出の子きさる義

朗 山 輅 岳 野

庶野八

士朗七

黄山七

每格七

五道

月いろあし月あくはぬのれい
焼うきぬをくかりけり
葉黄賣を道の枝折又山越て
火をくき作る笠外の名
くふはまの竹幸をきん袖肘取
姿をんをよ冬の名
あしやま葛うあつらまさあて
いつ中もくうまき鴨川の水
誰人う板の枝をうき

朗 士 大 雨 野 湖 左 浦 珉
朗 士 蘇 節 秀 風 雀 旦 屋

君の身を木兔うなく
 風のおくたひく物をふふや
 ちきま〜衣又目〜りをたて
 去書よる明りくるさ〜
 杉のつ〜らか蜂を這せらる
 蜜の子と花もさ〜めぬ末葉
 梅のよひしをなると〜
 いろくのふ又ふのめく花の雪
 ぬの詠う〜燕のななく

是はの杜若の人の御心記のりなり

鮎を漬よ〜とぬき〜
 けいせ〜ゆりく男の罪さ〜
 意を核をる母珠押出以
 松風糸はきききまを〜
 経〜様の〜
 半世節〜をまのふの〜
 足糸も〜あり結を〜
 玄川の繩を三回秋乃月
 酒の口ま〜
 うき人をたま〜

道 朗 蘇 節 秀 風 雀 且 屋 道
 秀 節 凡 雀 且 屋 秀 風 雀 且 屋 朗 道

おくや又あら 門 終 習 昇
 ぬきや小西日終 息を息まらぬ
 葉多く 橋 波 横 たふふ
 小笠ふく 風 八云より 飛 せと
 凡中を 遠く ありく 三つの子

道 屋 風 雀 旦

五道 四

士朗 四

大蘇 四

湖風 五

左雀 四

雨 三

浦 四

圖 曉

時 暮 暮 れ 程 州 萱 の 表 あり

葉 の 木 柳 の 花 を 吹 け け

旅 亦 亦 是 ハ 比 け け 物 と 連 け

笛 吹 け 加 け け 袂 け け け

ひ た け け と 月 の 流 け け 山川 け

麻 小 木 け け け け け け け け

さ い け け の 寒 け け け け け け

心 の 底 け け け け け け け け

曙 の 地 け け の 息 け け け け け

士朗

硯 静

野 喬

周 瑞

楚 江

雪 橋

白 慈

大 清

志きさうとれハ夏の神ノ誇
青藍

ひきやくとく母衣衣連衣をきけて
朗

松ハ涼一き銀屏風
曉

灯して言似て見えたる鶴御舟
喬

何言て噂やう子位の一考
東蹊

存命て形さハうきよも面白
左谷

朽木のやうな夢を哭出す
克之

ひしくとる花衣衣する云之日
茂龍

手筆示能る蓋蒲公英
瑞

灰りまさら寸見小さく
橋

ま白なき敷ぬゆる噪の百
藍

朝日を啼ハふ音やうらん
清

乞食の飯たき捨一土の鍋
蹊

不意の振舞のまうあうむ
谷

故のまうのまう敷入乃付
之

さとりるるたる風雲の
龍

いろく小候きのこち秋の
曉

鶯歌ハ赤きまのほろむ
香

くま羽音阿やまき衣の世を捨て
瑞

嘗る未止へのり摺り
名地為人よものひ白や
七重の花は八重よ咲く
旅あちも雲の姿と別か
二日三日の嘘うき

朗 橋 江 静 蕙

圃 曉 三

士 朗 三 大清 二

硯 静 三 青藍 二

楚 河 三 克 二

雪 橋 三 茂 龍 二

林 白 慈 三

すゝややのふふ休ハ志つるや
花時鳥 月 雪の 窓
大船の浮出家波のまじりて
そと吹たくる 杖のきりり
いつとなく山家集よむ草のお
去りまかりり 萩の実をとる
折の束のきりり 掃ひたる夕戸簾
旅の詞をまゝをうりかりり
叩とも押ともぬね瓶のふと
露くりにとて懐かしく

士朗
松菊
阿城
大商
吐山
昨来
橘良
竹堂
駕風

清くは之辨日よむふ好く
君のほろしき柳引けり
身うらみき 採 女の清く春の水
至させハ述る 春 髪
伝乐の村ハ何事やう物やりを
碁うちう来たと罫の貝ふく
夏の花の涼しきを月といふやん
萍の葉小似るものもさ
なまらもる鳴 梅の雪の西智と
若きしあふをともるるさ
世の中ハ管のうらみもさういふ

金谷
輅
朗
菊
城
商
山
来
良
堂
風

筆も束の末にうつくしく
 雲の助り糸のまを光に指し
 岩のくろくの水を一口
 むくくと降る雨のむくむく
 石の煙へ火を指して
 敷き藁の後の跡の寺の庭
 木の枯葉は又鳴る音を
 百姓の粟の賣りさるる月の
 板戸のうらさを歩け人々
 山の麓ハ末もつすぬ篠ふきて
 物を生きたる池の水

谷 轡 朗 菊 城 商 山 五 雄 良 堂 風

花よ葉つく男背 高き
 色の洗ふ椽の先くと萱草
 ねむろよよする春ハゆく

谷 躬 貫 木 天 雄

岳轡 三

士朗 三

松菊 三

阿城 三

大商 三

吐山 三

竹堂 三

駕風 三

金谷 三

五雄 二

躬貫 一

枕士於也下五

昨来二
橘良三

木天一

左世城若

紅梅やまぬきつくる 玉簾
やもー火子きまの夕 言
猿橋と月のやつく 哀より
ふくむのけり 西のさし山
鳥の尾をまをたきし 放すし
戸をおひひすふ時 致くりり
一日の雇 進人を 炭ころり
宇治へもつくり 舟 船
古言をきけ 八洞の ぬきをら

士朗

岳輅

免洲

大阿

武三

嵐峰

駄三

洲

春日遊少少

花莖健ふハ水の有りりりり
秋の木の只る事しらハ窓の月
夕ふらや雲の様ふまあうー
葎のふや路通り蔬すうう
白ふよ木のけりーまろ小僧が
香のまてほめ守梅のさくりが
そくくの附面ふらむ影木が
おそりともいそげ月もろ影が
夕鳥や登るをふくあう味尾

墨山
月央
桂五
竹有
卓池
柯亭
楳間
榑涯
清門

批七於初下冊八

春風や唱海の町の小田杖賣
大年もかうハソウー花の糸
あゝろよまここのよ地を吹花の暮
一こ夜ハ父あも花のすーの山
夕るれハヤらうき猫のこ鳥
風や障子又うつる竹すこき
名原や抱くきくやる菴の犬

雪洲
方明
湖風
秋奉
佳雄
田江
士峰

三日月を何と云へやつたを深こ鳥
羽布の中さくく小動く人の歌
百姓の飯付とて 夏 の 月

常梅
魚来
桐屏

乳

秋法師とよハ多ハをくす
神ノ主の御ノ一様主の乃ノ巻
嘗ハ好ヒ上ノよ三日の月
花の妙法をくても一不二の山
却とすく為る小多山ノ
夏の月ぬきくもなき甚芒
蓬蓬人蓋を朝飯喰ふり
かへあみく雨のやんりか
海下とくふを思へ山の上
春の風初つり来る壇りか
こるな小笑ふやうや不二の山

枕七歌初下世九

月底

珉屋

東陽

千阿

古東

菊方

得之

東蹊

大商

茂龍

菅茂

湖を家庭又せん 夏の月
香の来て松の葉むる小書江
白きく小形 流る茶ハなりりり
刈秋ヤ人小もする草の蔓
宮崎ヤ舟小来て鳴 鹿の音
今きくく鳴さハ月もを出さ
するめく心臆のたるさよ春のる
浮出さく月くかくは蛙か
嘗よ流るるあくハ隣やらう

蕉角

白慈

大阜

硯静

金谷

留子

吉甫

橘老

九岳

病後吟

そとをばふえつく歩み外

騏六

名月のあまひわく 鬼尾

圃曉

のつとある月ハを曾の阿比

野喬

子を連く煉をきふくる男

岱呂

る物もいうふゆす色ハ花うさ

竹田郎

るやおもひもすぬ盤の扇

東水

樹ハよまの休ハましく日ハ曇

秋鶴

鏡汁の供乃くゆやいせ小所

五道

仏あし積る日あらしんを流る

夢阿

女郎花紙の冥ぢよあやうん

意逸

推けおやあをを呼たる葉の烟

栗大

言ふるや雀啼ゆふさく

求巳

掃よせを常ひろん字活の糸

駕風

さふくといよきるをこ籬のあ

我丈

あめやうか戸のあく言よあ月

大蘇

月影のまあも似くもあ月

應亭

ねもーあまきふこのあせん草

素剛

一あてゆるりもすむやくま

太清

さる鳥やあほ小ぢるるの沓

秋國

あきりすはやくうこくあな

浦且

枕七歌初下

兼吟多しつらして松ふゆきや
月丸う柳ハ長うをりふたり
暮風や梅はの里の朝 朗
川舟のひらりとけきり夕花
湖を木の音みしそり梅の花
朽けを松屋はけりこの装の目
放しやきくハ大粒小をち常
あききくまきあてもつぬ柳
伊勢笠や生海風のこる年
鴨つ雛水多水のさきりき

木容
沙鷗
周瑞
虎更
魯翠
諭草
木人
永齊
左雀
五雄

松七敷初下里

風ふ人もあられまの 菴
おもしや毛虫のりし梅の花
笑ふ門へ福りまあるまよ梅の花
大は繪の鬼も眠るま喜の風
まよしや松りし松へ虹りつ
両のまよまを押しま喜り蛙
まよ鳥や松屋くのまよ
杖の柳ハ月をちりまよ
夢のまよやわらまよ人まよ
しきりさきりまよまよまよ山
二月まであまほり梅の花

松菊
深杉
楓
青崎
士龍
棋道
黄山
蘭圃
桐居
左谷
金陵

こゝろハ一くせ切るとよ花の山
さくさくや人よをさきたる石の角
晴水鶏夜ハ下跡をくま西が
暁やけさし仏をよよす一さ
山香のあよびあせりよま
音よん一ハ月ハ却山は揚を雀
十月や萩の中うく不意の山
さひ一さ千里の中を枯尾志
夕もまら杉ハ丸家の志をり危
秋名の淡くよ。明るよ水の月

墨樵
九魯
大巢
珉上
朱月
楚江
芳水
平齊
佳長
雨節

七於初西三

花の山ハ一くせ切るとよ花の山
さくさくや人よをさきたる石の角
晴水鶏夜ハ下跡をくま西が
暁やけさし仏をよよす一さ
山香のあよびあせりよま
音よん一ハ月ハ却山は揚を雀
十月や萩の中うく不意の山
さひ一さ千里の中を枯尾志
夕もまら杉ハ丸家の志をり危
秋名の淡くよ。明るよ水の月

有残
午風
杉燕
啟甫
冠四郎
素月
如月
吐山
友鳳
沂遊
青虎

低くくは高くくはけし山さくらく
 まい月や月可免のうた実うん
 日のうけの小は雲は跡る松竹引
 嘉神のゆよさつちりるきりか
 風のあやもは月の志はくちり
 秋の風雀をたてて放ちりりり
 怪鈴や萩ハ火ともはるの上
 松明て竹の多あほくく
 喜ぬや小貝とりつくくをつじ
 夕輝を飛せを鬼のきらんくか
 へり又又まのうへに表板りか

二丸
 可竹
 竹堂
 斗石
 葛齋
 蘇下
 吐月
 兔洲
 松菴
 朱鶴
 伊楽堂

批七初下四

必月や蚤り小なしもやもくく
 炬火をよよせ鞍馬の番おろく
 赤ともをゆる小月なれてまてら松菴花
 風や仙を健くまき山のうく
 とうりくくも世ハおもくくく鉄押
 いやるまき空より月の白く
 松風もやんで松竹の管くか
 さくむくく山は不らくく杯を像
 若月ハ只山まよくく
 降るくく吹けくく小雪の嵐山

其中
 雪封
 株洲
 橋良
 里桐
 草人
 可玄
 雨来
 和楽
 丈阿

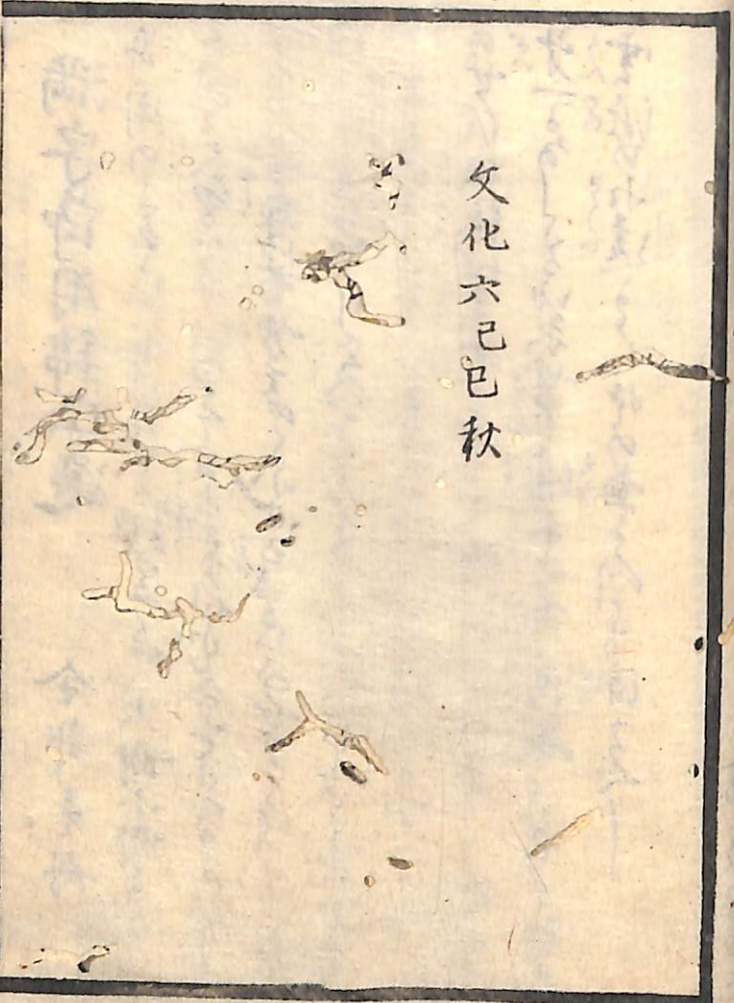
礼

神雪や雪の食やと菓を荷て
 雨の日小生 秋の雨ふすじりくさき小萩小
 小夜更て揚の中由と月よ小
 うらや何所の所多き茶を
 室多月 雨煙の煙をちくす
 松風やく来るの之の時 名
 いらるや人くけの切竹の中
 北ハ山南ハ海と天の川
 谷の外の小ハ何とそ 神淡山
 雪をすく 二束火ともする砂籠

躬貫 蘭谷 乙牛 嵐峰 かつ 楓江 霞洲 葛井 鹿野 得舟 岳輅

批七秋初下四五

文化六己巳秋



光琳の松皮てこるまじり
秋の月何きまふすこたる言
葉の二言をよ物の色は言
面女の梅津はま粧打て
もなき遠とあはさきよ成
四の路の路とへは恨む
軍むさきまよさつる 功炎
吉原の薫一つけ出は空の屯
波えらうはさきとちを降止ム
子自慢ふふり舞をる小神我
弟移履か 世生め 伍

靴七敷初下里

五 郎 五 郎 五 郎 五 郎 五 郎 五 郎 五 郎

任者へ舟ハ忌がり朝初くけ
芥子の如中鳥 人よま
夏衣子の子結ふ子の能き
むしーの母のあより字えら
態ありと死をぬんを粧ある
考とすられり移移の や
鶏鳴ノ夢の中をききけち
蛸を捨ひよはくくと如 靴
玉の明の影と之あるとまき
糸のよーの夢と移の落
山査子のまをくき捨るて

五 郎 五 郎 五 郎 五 郎 五 郎 五 郎 五 郎

落の空出火か滅せえらる
あふも又ふあは振つたかり
とくもあきほく嵐をうら也
さし矢射る事あるの老に蒼を
酒屋のうらたけ見より

朗 五 格 郎

也ふ山岩成魚子厚結啼うられ
及舟さびく漕つまよるり
のくくく梅の束置る年取て
さのもちめでは正月の月

白 周 五 滿 亞 周 白

批七初下更

春の風弱のけし向ふきり
賣らるるハ伯父の 大辰
しきぬけみ障子明きハ檀う
松脂 着るはまきりの面
君ひ合ふ事けりく美と白挿く
あまきの確むしものふきり
尾張坂やまま宅風といふ不
椀豆のまてて 豆ドー 呼
朝の月なかりの暎淡きあり
松板なるりハ三井寺の秋
さうし酒買まをりく垣紙く

毛 城 周 滿 毛 城 周 滿 毛 城

C

難ゆ 志くくくをり
 すけもるきき雪ま
 古榎の木の子のとくけしはる
 かけろふの嘴くうつる 蟾の春
 琵琶くきあき 宿の恋 病
 何く 木の明も子きてし 沖は
 材の花をろ四月 新あら
 魁て 松葉 萩きり 嵐 山
 おきひ久しき 死場さめん
 儂 鏡を現ぬやうき 詠め
 西風 雲あふよみ ながく の 面
 毛 水 畦 園 満 周 城

和七歌初下五九

網曳する 春を 空を 海を
 ぼよよと せて 春を ぬり 居る
 じ 食の むく を 語る 木の 月
 夏 洗の中へ 落ち 橋つ 上
 新 涼く 汀 田の 名の 袖あらし
 漱く 舟よふめと 臨み 持て 来る
 入 春の 舟を けり くる くる くる
 花を 撞出 せ 咲きの 後
 海を 山 許やうく 撞く 海を
 新 扇の 雲を 申う 来
 毛 水 畦 園 満 周 城

雪のやほ坂のをまきまの
 花すき録まつけゆは月
 しのりの能くよきの空を基て
 桐のさあ木のあまき形より
 群鳴小社とえ鳴る西の山
 小家のまげハ踏踏を 汲
 あとうくハまき木の後のは知りて
 傾城かりくるるの字智 花
 鳴早やまハ定めさきまるる
 あまきまうくく漱まうくゆあり

批七歌初下十

桂裏 粗乃 士朗 古我 乃 裏 朗 戎 乃 裏

慈心寺の男お人又酒のえハ
 向への啼啼 犬り吼 へり
 有鳴ハまきまの地の白木 槿
 何々踏くもまきまの秋
 天部の音居より 海唇の糞
 まきまのまきまのまきまの
 馬く助くまきまのまきまの
 小船の堤ゆまきまのまきまの

朗 戎 乃 裏 朗 戎 乃 裏

白芥子のあつちき方や竹のつる
 二三日とわのふさふさし水の時
 古くお竹のうへちちち夕あらし
 鴨牛や志のひ男のち力の粘
 こうせ軍のまらふかたれくま
 席一さうりあつちき標の根垣
 伊豫島のあはれんくま面を丸く
 あんつら船の提丸まきせられ
 魚けらひし海傾つらぬくを
 道なきは

瓶七粒初玉

狙乃

万盛

五周

同毛

曉臺

桂五

羅城

紫水

臥夫

岳格

垂満

葩香

成青

桃明

少如

午窓

桂裏

ひくくつ遊又遊くく涼
 押火燈くぬれ袖きり喜の丁
 ちちちちちちちちの四隅
 片をりおあちけ所は月夜
 魚物りく降くくく林の面
 水名を行よまをり日暮
 山麓のおくちりぐり浮藻草
 凍結やちちちち古
 一くくくもちちちちちちの甲
 兼歩りや眉毛をかちち言のお
 思嬌や竹の月夜を飾くま

桂裏

神宮の降出くくくくくくくく

綱女

明月やうきくくくくくくくく

粟雄庵

梅の中よふ梅くくくくくくく

松島
女葉

ちろくくくく後の降すくくくく

東壺

下巻りよきききききききき

匝満

くくくききおのきききききき

白岡

舞のきききききききききき

豹門

くく山の梅くくくくくくく

京
白池

苦ふおあくくくく日のおくく

士朗

川風の吹くすくくくくくく

岡毛

ぬきぬきくくくくくくく

五周

批七款初五三

白魚の背角を透瓜あぐり

曉臺

平蘭盆會

あゝ海へききとられり魂よん

越
賦原

秋の宵寝子半部くくくく

桂五

大井川念経あぬきあ

羅城

啼ぬ娘のあきくくくく

岳格

山梔子の花拾ひつくくく

他郎

あきくくくくくくくく

白岡

天明壬寅十一月



繪本嘯山科

全部成冊

凡種もしくもこれであらうやう筆の山科のそれ
とていつてはあつたか古の因縁よもはつた大足
おやのち女のまゝにふくむおのれとてあつて
うまをしの傳入をあつてハ思ふ事と何とてせうと
うまの山科のふくむおのれとてあつて

批七款初下至五

蕙齋筆畫

蕙齋の画

一 筆画譜

福善齋遺稿北齋翁副筆

此二書ハ略画の臨本なりと名家の筆の力をいへり

数年の工夫とていふは人にも早速まねびとて

席上の一頁とて之は便と形とをも俗なりて俚

たりと風流漫戯の京家や坊を口方の詞客

俳人け画の力をいへり雅席のひげとて形と

はすや飯あつて清奥とてあつて

晴雨考

年々出版

此書八年内の晴雨風雲以考へ五運六氣の理と
 一きくして天地乃機密をうひききとて年々
 出版を世にあらはれしむるは從て運氣より
 寒暖の順不順時候の正不正を豫知する物なれば
 家計も多し改心は並治すべき事なりとてその外養生
 護身の上につきては形も益に家計をなれば家毎に
 ありありと次第は重宝の多端なる事と知れり
 實に居家必用の書なり

大全早字節用集

節用せつようのせい世せい有ゆう敷しき板ばんををててはは家かををももたたひひはは地ち大だい
 中ちゆうのちゆうかかのか節せつのせつ二にてて一一とといいふふはは一一本ほんのほん筆ひつ毫ごうのごうちち
 何なにももああららずずとと迷まよひひ又また雲うんとといいふふはは一一本ほんのほん筆ひつ毫ごうのごうちち
 是こゝはは一一とと氣きちちとと椿つばきとと津つ液えきとと月つき水みづとといいふふはは一一本ほんのほん筆ひつ毫ごうのごうちち
 ああままににああららずずとといいふふはは一一本ほんのほん筆ひつ毫ごうのごうちち
 今いまのいま節せつ用よう八はち天てん地ち人じん相さう竹ちく本ほん音おん板ばんををててはは家かををももたたひひはは地ち大だい
 ひひををももたたひひはは地ち大だいのの福ふく多たくく財さい多たくく端たん字じををててはは家かををももたたひひはは地ち大だい

琉球紀行

全十冊

我薩府下の羨望平七翁と云ふ者其財公業の心誠
心は後年よりして掛山敷水をもて樂とせられし事
中より一と西國に掛ひく長崎銀行の銀行を以て
其よりすべく文政より山口屋中平の宗事の才以
高いつらた之に似たりと云ふ事たゞあつてこの銀行と云ふ
人の為は善き事なきやうに事なすあつてこの銀行と云ふ
名取古説はどの外は船荷の赤利は其の目数順洛れ
けにもとねと切せられし事なきまで同板の後と

法方と云ふけし事係人違行れと云ふ者其買入
さんとの企ふありけし事係人違行れと云ふ者其買入
わらふ事しき事の解を以て我が事と云ふ事其別
友ありと云ふ事其買入も其解を以て我が事と云ふ事其別
亡人の救ふ入ありけし事係人違行れと云ふ者其買入
誤りけし事其買入の事其意以てけし事係人違行れ
わらふけし事其買入の事其意以てけし事係人違行れ
けし事係人違行れと云ふ事其買入の事其意以てけし事係人
わらふ事其買入の事其意以てけし事係人違行れと云ふ事其買入

とねりた親玉 全部五冊

親玉の玉ハ茶権わの浦の光りふほきり狸のむハにむすの
糸帝さうとひう。袂袍の二玉を定の帝が胸とひや
ふはねのむハ小波が思ひ成もる波をいハ人玉ふは二目の
むりるはきん玉あがハ花火の玉川で磨ふれ光りあき
石と玉との目利自輝は玉の雲葉と收珠つるさあがて
あつ玉の幸さうと居玉の猪ハ若紅玉目の新板よりづやく
まねの親玉とよハ玉のさきへとてねふ玉まのさねの
はれく玉子酒の碎きげんの一母よをあつ

おもくは影を

俳諧五七集

枇杷園士朗先生著 全五冊

枇杷園先生ハ一世の雅英として雄名海内よそよそ
生涯の俳諧教よるまき中も好文の凡流新奇なれ
数篇とさへひ三十玉部をつらひてきりて五七集といふ
身くくは生涯の俳諧ハるにたふる事あり善なり
美にせぬその流をくらハ勿論他阿の人にもるを
まへう玉をつらひ金をちりむめ 詞花言葉や
よの海に群英の白までひろく漱はき守室とハり書

同 霍芝集

朱樹翁東方記新なり法本
よて同叔せしをあつむ

同 發句集

先生二世の名句發句集
初學の爲にせし書なり

同 後篇

同前篇よりよきたる發句
めし書なり

同 類題發句集

類題發句集とよきたる發句集
同前
雜にわらちて見安しむ

同 東都日本橋
新右衛門丁

前川 六左衛門

尾陽名古屋
本町七丁目

永樂屋東四郎

蘭藥鏡原 全部五卷 内 部 三卷出来

此書ハ源名「獨魯傑列印」ト云フ和蘭本草集成ノ書

ヲ譯スル所ニ「金石草木鳥獸昆蟲及ヒ造釀等ノ類ニ至ルテ

一ツモ殘ス所ナク」品ヲトニ和漢ノ名ヲ記シ其性ノ溫涼酸毒ヲ辨シ其

彼邦ニテ製煉ノ術ニヨリテ藥精ヲ取り露水ヲ製表シ膏油酒醋

等ヲ製表造スルコトニ至ルマテオヨソ藥物ニアツカルノ一ハ微細ニ

コレヲ論シ精密ニコレヲ辨セル所ナリカレモトヨリ醫家ノ

至寶ノミニアラス凡博物ノ諸君子ノ萬邦ノ名物ヲ搜索

研究スル必用ノ珍書ナリ

尾張

東壁堂主人謹識

